

ペリオ-インプラント臨床の
科学的情報を
アップデートできる一冊



歯周病患者のインプラント治療

弘岡秀明・古賀剛人 著

A4判変/248頁 定価：18,500円＋税
医歯薬出版（2017年6月）

栃木県宇都宮市・藤橋歯科医院
評・安生朝子（歯科衛生士）

歯周病は、歯冠と歯根面に付着した口腔内バイオフィームによって引き起こされるある種の感染症であることから、その基本治療は、歯肉縁上と縁下のバイオフィームを除去することで、疾患の進行を遅延させることに始まる。その維持のためには治療後のメンテナンスが必要不可欠であることを、私は自身の35年の歯科衛生士業務からも痛感している。本来われわれの責務は「歯を残す」ことであり、そのため歯科衛生士は、患者さん自身のプラークコントロールレベルの維持に努めながら、SRPとPTCで口腔内細菌叢をよりよい環境に保つ。一方で歯科医師によって確かな歯周外科治療、再生療法が行われた後の長期メンテナンスの症例においてですら、まれに抜歯を余儀なくされることがある。その多くは歯根破折であり、歯周病の進行や悪化はあまり経験のないことである。これは本書の著者である弘岡秀明先生、

古賀剛人先生と同様に、私もスカンジナビア学派を学んだ者としていえる。

本書をはじめて手にしたとき「歯科衛生士には難しいかな？」というのが私の正直な実感である。しかし、「本書を読む前に一歯周治療における臨床パラメータの基礎知識一」が冒頭に記されていることで、臨床経験の少ない歯科衛生士でも教本として入りやすい。「Chapter ①」では、インプラント治療の歴史の変遷をあらためて知ることができる。そのなかで歯科衛生士には、「Milestone ②」で記されている「オッセオインテグレーション獲得の必要条件6項目」を再考していただきたい。「Chapter ②」では、いよいよ歯周病患者のインプラント治療を学ぶ。歯周基本治療後の欠損治療において、骨吸収状態ごとにインプラント埋入難易度を知ることができる。「歯周病患者はインプラント周囲炎の罹患率が高い」というエビデンスから、歯周病で歯を失った患者さんに行うインプラント治療は術前、術中、術後においてその感染源を徹底的にコントロールすることが不可欠であり、それに不安があればほかに治療方法を考えるべきである、とまとめられている。「Chapter ③」では、インプラント周囲炎への対応として歯科衛生士が行うことが多いサポートセラピーを発症予防の一次予防、再発防止の二次予防として、それぞれにエビデンスが提示されている。一次予防については天然歯同様にプラークコントロールの徹底が重要であること、また、問診、視診、プロービング時の注意点が補綴装置の種類や形態の特徴をも含め提示されている。

歯科医師とともに歯周治療を担い、インプラント治療に取り組む立場として、歯科衛生士スキルをさらにアップさせていきたい、と思わせる内容であった。もつべき知識の獲得のためには、他に類をみない貴重な一冊となった。